

たより  
ニユース 第35号

【美紗の会】

西松布咏

第35号

平成十二年十一月二十日

発行者  
「美紗の会」  
☎03-3441-2726  
編集責任者  
大久保 朋子

都会の喧嘩騒から戻り重いドアを開けると、西方の隣は明るい光の帯が長く伸び、夜は街の灯りが静かにはのかに侵入してくれる。それが六年間住み慣れた大森の我家の原風景だつた。そしてこの七月、南北線の白金台に隣接している小さなビルの五階が住まいとなった。大森でのあの感触が忘れられず又豊と陰除。しつこい壁にこだわった生活が続いている。やはり三味線の音は、この空間でこそ響いてくれるのだ。今年もさざまな「場」で三味線を弾いた間の四国高松では、松岡正剛氏の日本再発見塾「望憶の声・粹の絃」にゲスト出演。夕闇があたりを包み網のとばかりから忍んぐくる風が、もうその炎を妖しく揺らし、この世のものは思えぬ靈気の中で私の声は、まさに「望憶」の声と重なり、松岡氏から「心にしみるなんてもんぢやない魂の奥から響いてくるような名調子」と過分な言葉をいたいたい。

七月七日の七夕の日は、田中優子さんと「三都劇場で『江戸の音を聞く』と題した帝國華道院教養講座に出演。おもに生け花にたずさわる方々だったので、着物の色合いが四季おりおりの明るい、そして糸に花せる女心といつた唄と話に花が咲いた。

九月十日は恒例の神田龍名館で美紗の会ゆかただぞらい。今回も大型新人が一いつになく華登場あとで、大型新人が一いつになく華登場あとで活気あふれる雰囲気に満ちていた。

が、緋の浴衣を粹に着こなし可愛く唄い、「月の砂漠」

しかし唄えない、と思われていた固  
三雲さんは、扇子、手片で、無事にデ  
ミュー。三味線に夢中になり  
飼い猫の「ニャーニャー」に、スト  
ライキされる程けいこしは、伊  
勢さん。そしてちよつぱり先輩  
の山中さんは、三人の「お手本  
を、とばかりにトバツバッ  
タード」いつになく緊張した面  
持ち。美秒の会のいつもの和  
気あいの流れに、新風が  
心地良い刺激となつて先輩の  
叔父様連は、やたら武者ぶる  
しみじみ嬉しい美秒の会浴衣  
といふよろしくコップ酒をおつ  
ている様子であった。  
九月三十一日新湯岩室温泉で  
「書」と「語り」と「三味線  
音楽」の催し。温泉宿で日本  
古来の「遊び」をとり戻そう  
と、「田中俊子と友達ライ  
ブ」の仲間入りをさせていた  
江戸時代から続く歴史のあ  
る宿のような一夜、と大舞台好  
評だったようだ。三味線は舞  
台とお客様の心に届くことであ  
ためて「場」の大切さを思つ  
た。  
ある夜更け、ふとチャレンジ  
ルをひねるとテレビの画面は  
アムステルダムの運河でのコ  
ンサートの模様を映していた。  
ライトアップされた船の搖  
らぎの上で、奏者もお客もま  
で映画のワーナー・シーンのよう  
に幸せいそうに音の世界への身を  
ゆだねている。その様子をゲ  
ストの美輪明宏が、「本当にう  
らやましい光明です。現日常  
生活での、自然と音楽との  
間が、ひとつになつて楽しん

10. The following table gives the number of hours per week spent by students in various activities.

—〇世紀最後の秋に

心うこと 本郷公基

していけばいい。」というふうに思いました。私は同じ世代の頑固親父——未婚の母になることに最後まで反対しつづけた——も最後は「なまづな」の選択を認めました。平凡で普通の人生が幸福の基礎条件であると信じてきた私は、いつか若干の違和感は残りますが、それぞれの個性を尊重する原作者の考へは、これからの日本人の生き方を示唆する啓蒙的な思想であるのです。

さて八時半が過ぎ、食事の準備ができるまで玄関の植え込みの手入れや庭の芝刈りをします。大阪に単身赴任中は庭の芝が伸びて、さながら無人芝生のようでありました。現在は少しは庭らしく見えます。

ブランチのような食事を終えると、運動を兼ねて最寄のポストまで郵便物を出しにでかけます。我が家のある辻堂は鎌倉山の南端にあり、ポストのあるモノレールの西鎌倉駅までは相当の下り坂であり、行きは楽ですが、帰りは上り坂で秋でも着くつるは一汗かいて毎回シャワーを浴びるほどの勾配です。

午前中はこのようによく時間がつぶすことができますが、午後何の予定もない日は読書をしたり、テレビを見たりしているうちにも目が疲れてうとうとと居眠つてしまつてが多く、ボケるということはこういう状態から始まるのかなと思つたりして、

などとボケ防止を兼ねて三週間前にパソコンを買いました。斎藤君をはじめ何人かの店員さんのアドバイスに従い、国産でデスクトップ型液晶画面のものを買いました。これがなかなかの優れもので、毎日数時間パソコンの前で勉強をしています。やつとパソコン

が手に入つてうれしくたまらず、女房に「武士がようやく境内である。」といいましたらケラケラと笑われてしまいました。正直なところ年寄りには中々使いたくないませんが、ひまに明かしていろいろ聞いて下さいしてみたいと考えています。美紗の会のメンバーでパソコンをお持ちの方は是非メールを下さい。

私はモームの「月と六ペンス」のモデルになつた印象画の画家ゴーギヤンの一生を理想と考えできました。彼はロンドンの株式取引所で働くサラリーマンで転向しましたが、四十歳のときにはゴーギヤンのような画家ではありませんし、これから何をするかもきめていませんが、今後は自分のために七五%、他人のために二五%といつた感じで第二の人生を生きたいときました。と考えていきたいと思います。

開話休題。オリエンピックが終わり、日本の女子選手の活躍を見て日ごろ痛感していること、即ちこれが国は女性の時代に入ったことを実感しているます。マラソンにおける男子選手の不甲斐なさに比し、高橋尚子選手の金メダルはこの時代の日本の女性の代表として永く語り継がることだろうと思ひます。先の「ゆかたざらい」でも美紗の会は女性の方がずっと上手ですぱらしい人が居られると思いました。最後に元老井鍛冶會館祭典で懐かしい松竹大船映画祭典で木下恵介の「椿山節考」を観ましたのが、学生時代に読んだましたが、学生時代に読んだ本を読んときどき不思議な感動を覚え、自分もその年になり、順番がきたら潔くさわやかに山にこもりたいと考えていました。

そうは言つても今しばらくは順番がこないでようからその視線を意識するところ特に異性のね。気取らなくなつた。これが薬。氣取らなくなつたらおしまいです。」

## 世紀末小唄のお稽古

三雲謙

なりました。ところが、初回のお稽古で冷汗をかきながら大混乱のうち「ゆきにようろか」をならつたあと、いきなり「九月のはじめには、おさらい会がありますからで下さい。」ということになりましたが、師匠は本気でした。始め「長月。ゆかたざら。」で「一月で三昧線が弾け伊勢さんと、「忍ぶ怨路」をはかなくして、三昧線が弾け伊勢さんと、まさにござれて、師匠の特訓のおかげで「ゆきによろうか」と「お伊勢参り」をこなさせていただきました。ゆかたを着て、気分はすっかり弁天小僧菊之助。「……風の鳴子の音高く……」そして、なんのはずみか月末には、師匠と加藤さんのお伴をし、新潟へ出立つ。

岩室温泉高島屋へ遠征。田中優子さん主宰の「粹」をテーマにした「日本芸能の夕べ」でした。三百年近い歴史を持つひなびた旅館で聞く師匠の三味線とうた。まさに「粹」なひとときでした。  
神無月。なぜか師匠、傳田さんはふくむ十数人で祇園に遊ぶ。  
おかげま茶屋風の少し妖し気なお座敷で「お伊勢参り」を唄うことになった。それは座興でした。しかし師匠が「秋の夜べ」を弾き唄はじめると、座の一同はもとより、お店全体が昔の風情をおもいだす。ついには、常磐津の師匠という御亭王もたまらず登場し、三味線のとつておきを一曲披露してくださいました。とうに、「世紀末唄の稽古は」日本中を行ったり、来たり予想もつかず、飛びつきり楽しんでもらっています。ならばやつて来る世紀にも、「ショウガ」「イナ」。

ランティア精神から。どこかがお稽古を始めた今、こんなに楽しい習い事があつたのかと思つてゐるそうです。三昧線の音が心地良く、声を出すことも気持ち良く、やつぱり日本人だな、という気分だそうです。

ファイトいっぱいの山中さん、これから一生懸命お稽古で十年、二十年後には、ねえ食事で釣らなくとも聞きたくてくれるファンを作りたい、だから長生きして、と師匠に言ったとか。私達は、同じく年だから大丈夫!お互いに長生きしてお稽古に精進します。

三日目は三雲さん。お勧め先は、『電力中央研究所』。研究課題は、『経済社会展望』。何とも難しく堅いお仕事の様です。

弟子入りのきっかけは、三雲さん御自身が今回のたよりに書いてらっしゃいますが、おだてられてその気になりますが、した、おだてに乗りやすいのも才能かな」と低音で静かに話される三雲さん。三昧線と眼と両方のお稽古をなさっていますが、今は眼の調子にとてもも満足があります。

そしてその堅いお仕事のイメージから意外な言葉が一詞の意味深さ、三昧線との掛け合いで、そしてその奥にあるものをおいかけるうちに深みはまつてきそうで恐い……と。こんな、独身のいい男が小唄の深みにはまるところなんて、チョイト見てみたいですね。

伊勢さんは三雲さんと同じ日にインタビュー。

二人の会話からどうも同期のライバルという仲らしく、お互に習つてゐる唄にさぐりを入れています。

どうも廻りが永遠のライバルと煽つてゐる様ですが、伊

勢さんは女子美の助教授といふお仕事、照沼さん、日比野さんとの交流の中から師匠との出会いがありました。前々から三絃には潜在的な興味があつた伊勢さん、浅草で友人達との遊びの中で、芸者さんの三味の音を間近に聞いたことでどうしても三味線がほしくなったとか。弟子入りして三味線だけ、と思つていたのに眼もと言われエーツ。それでもお稽古を始めると三味の音と唄の入り込んだ掛け合ひが難しく、又そこがおもしろくて、とおしゃる。My三味線持参の熱心なお稽古学

「虹の会」のお知らせ

平成十二年十二月二十一日(火)六時半より内幸町ホールで、第三回「虹の会」が開催される。

今回は「時雨降る夜の違うは別れ」と題し、花柳千寿文の睡り・西松布咏の唄と三絃・ゲストに田中優子氏を招いて、日本式美を美しくしつとりと味わつていただきたいと思ひます。皆様のお越しをお待ちいたしております。

端唄 粋な浮世  
上方唄 更けて逢う夜  
長唄 柳やなぎ  
歌沢 枯野  
詞曲 明  
作曲 田中優子  
作曲 西松布咏  
構成演出 三枝孝榮  
振付 花柳千寿文

早や告ぐる  
いつしかに  
ちよつと妙なお話

田中優子

花柳千寿文  
西松布咏  
花柳千寿文  
西松布咏  
寺師美智子  
寺師美智子  
西松布咏  
田中優子  
田中優子  
小野里禮子  
小野里禮子  
花柳千寿文  
花柳千寿文  
寺師美智子  
寺師美智子  
西松布咏  
田中優子  
田中優子  
小野里禮子  
小野里禮子

校の研究室も、車の中も、匠の唄と三味の音が流れている様子。練習不足の言い訳を毎回さがしている私にとって頭が下がります。美大の先生たちが下がります。

今回四人の方達にインバビューをしておどろいたのは伊勢さん。三味線をかかえている姿が不思議と絵になつてしましました。

というより、学生さんの様な伊勢さん。三味線をかかえていふ姿が不思議と絵になつてしまつました。

ビューをしておどろいたのは四人併お稽古して気持ちが良くなり、と言われたこと。こんなに小唄を愛する方達が加わって美紗の会もますます楽しくなつていきそうです。

(大久保記)